

本草家阿部照任とその著作

中 田 吉 信

はじめに

照任の伝記資料

照任についての従来の研究

照任の著作

照任の後裔——二人の将翁

はじめに

江戸時代中期の本草家は系統的に二つに分けることができる。一は稻生若水——松岡恕庵——小野蘭山と受継がれたもので、主として、文献上の知識の集積によって、日本本草学の体系化をはかろうとするものであった。「文献派」と名付けることもできようし、いづれも京都に居を構えていたから、「京都学派」と呼ぶこともできよう。蘭山の弟子には、飯沼慾齋、山本世儒、岩崎常正等があり、尾張本草学の水谷助六（豊文）も蘭山に学んでおり、助六の弟子に伊藤圭介、その弟子に田中芳男と続くから、この派は日本

本草学ないしは博物学の本流ということができよう。これに対し、「実地派」とも名付けるべき別の派があった。阿部照任（将翁）を祖とするもので、その弟子に田村蘭水、松井重康、植村左平次があり、蘭水の弟子に、曾榮（占春）、田村西湖、栗本丹洲、平賀源内等がいた。この派の人々の多くは、各地をめぐって採薬に従事し、現物と文献の記載を比較検討することに重点をおいた。江戸に住み、弟子も江戸の人が多かったから、「江戸学派」といってもよいであろう。この派は、当時の日本本草学界では、本流とはいえなかったが、この人達の活躍によって、近代科学的な博物学の芽が育てられたと見る人もいる。その祖ともいっ

き阿部照任すなわち将翁については、経歴も著作も、まだ不明な点が多い。本稿では、彼の伝記資料と、彼についての従来の研究、彼の著作について解説し、さらに彼の後裔について言及することにする。

照任の伝記資料

阿部照任(とる)の伝記資料として、従来あげられてきたのは、次の二つである。

(a) 東条琴台編『先哲叢談続編』巻四。阿部将翁の項。

これは堀田璋左右・川上多助共編の『日本偉人言行資料』九(国史研究会 大正五年刊)に収録されている。照任の伝記としては最も精しい。琴台(一七九五)の三十歳頃の作というから、照任の歿年(五三)から七十年程たって書かれたものであろう。

(b) 浅田宗伯(栗園)『皇国名医伝』中巻。阿部照任の項。当館には、嘉永四年(五)序刊本(松本 高美山甚左衛門等 三冊 請求記号 490.28-4819k)が所蔵されている。

従来の照任の伝記は、『大日本人名辞書』をはじめ、ほとんどがこの二つの資料と、後述の「葉草御用書上」に拠って書かれていたが、当館の白井文庫には次のものがある。

(c) 菅敬愛編『阿部将翁事蹟資料』(特一——二〇九四)

この書には、明治四十二年十一月付の編者の「誌」があ

り、「阿部将翁事蹟取調顛末書」の項には、「明治三十八年以来、旧記及口碑に徴し、取調をなしたるに云々」とあるから、今世紀になってからの調査である。内容的には、享年間の丹羽正伯、阿部照任等の幕命による南部地方の採薬事業を記したもので、照任の伝記資料としては、それほど参考にならない。しかし「顛末書」の項には、示唆を受けた点が多い。巻末に「本書ハ明治四十三年二月南部伯爵家蔵本ヲ借りテ之ヲ写ス 白礫水」と記されている。

照任についての従来の研究

照任については、彼と同郷という上関光三氏が次のような論文を書いている。

(a) 本草家阿部友之進とその著書 (「本草」第四号 昭和七年十月 五一—五三頁)

(e) 江戸の栗園と阿部友之進 (「本草」第十六号 昭和八年十一月 六一—六三頁)

(f) 「採薬使記」を読む (「本草」第十八号 昭和九年一月 八六—八七頁)

(g) 本草家阿部将翁の事蹟と墓所のことなど (「掃苔」第五卷第七号 二二七—二三〇頁)

これらのうち、(g)の「掃苔」に載せられているものが最も詳しく、照任の年譜も掲載されている。ただこの雑誌は当館にはない。東大の史料編纂所にはそろっている。また

この論文の節録が「中外医事新報」一二三三号（昭和十一年七月二十八日）に掲載されている。上関氏は、このほか、「本草家阿部友之進に就て」という論文を「新岩山人」の昭和十年六、七、八月号に連載したというが、寓目の機会を得ない。

沢式氏が次の論文を書いている。

(h) 日京医蹟考 (一)・(二)（「日本医事新報」五一〇・五一
一一号 昭和七年五月二一日・二八日）

照任の人参園のあった場所について考察し、あわせて照任の子孫について言及している。

次に日本本草学ないしは博物学の研究書のうち、照任について記しているものをあげよう。

(i) 上田三平『日本薬園史の研究』（昭和五年刊）

江戸時代の薬園についての精密な研究で、図版、地図も豊富である。二二頁から三頁にかけ照任のことを記し、三四頁から七頁まで所謂「薬草御用書上」を内閣文庫蔵本から抄録している。

(j) 白井光太郎『本草学論攷』第一冊（春陽堂 昭和八年刊）

白井氏の論文集。「支那及日本本草学の沿革及本草家の伝記」(五三頁)と、「長寿の本草学者に就きて」(〇三頁)で、照任について記している。

(k) 白井光太郎『改訂日本博物学年表』（大岡山書店 昭和九年刊）

初版は明治二十四年、増訂版は同四一年、改訂増補版は昭和七年の白井氏の歿後、その朱筆補入をもとに、矢野宗幹氏が編さんした。戦後、石橋栄達氏が「科学史研究」一二二号(四九)・一七号(五二)に訂正を發表した。

(l) 湯浅明『日本植物学史』（研究社 昭和二三年刊）

第七章の「植物学史を飾る植物学者」(〇三頁)で照任の伝記を記しており、第六章の年表(八七頁)も参考になる。

(m) 日本学士院編『明治前日本植物学史』第一巻・第二巻（日本学術振興会 昭和三五―三八年刊）

第一巻は動物学で、執筆は上野益三氏。一七一頁から三頁にかけ、照任について記しているほか、参考になる点が非常に多い。第二巻は植物学で、執筆は湯浅明氏等。二二六頁から八頁にかけ、照任の年譜が記され、第八章の關係図書のリストも有用である。

(n) 上野益三『日本植物学史』（平凡社 昭和四八年刊）

本書の半ば以上を占める「新撰日本博物学年表」は精密で、非常に参考になる。索引も完備しているので、これから参照してゆけばよい。文献目録も充実しており、墳墓録も貴重である。

尾藤正英氏の次の論文は、本草学の学問的方法のあり方と、その社会的意義とに分析の中心がおかれているが、稲

生若水、松岡恕庵、田村藍水、平賀源内等とともに、阿部照任もとりあげられている。

- (o) 江戸時代中期における本草学——近代科学の生成と関連する面より——(東京大学教養学部人文科学科紀要) 第一一集 歴史学研究報告第五集 歴史と文化Ⅱ 昭和三二年四月 二二—一八六頁)

照任の著作

阿部照任は南部盛岡の人といわれ、通称は友之進、将翁と号した。またの名を輝任ともいい、字を伯山・伯東・丹山といったという。宝曆三年(五_三)正月二十六日あるいは二十八日、神田三河町の自宅で歿し、下谷三輪の梅林寺に葬られた。ただ彼の生年ははっきりしない。『先哲叢談続編』巻四の彼の伝記には、慶安三年(五_〇)生れで、享年百四歳と記されているが、これを疑問視する人も少くない(1)。また彼はかつて中国に漂着し、彼の地で本草を学んだというが、この点も確かでない(2)。比較的是っきりしているのは、享保六年(二_七)、幕府が本草に通じた者を募集した際に、これに応じてからの三十余年間で(3)、この間については、彼の所謂「葉草御用書上」からある程度うかがうことができる。彼の伝記については、前掲の上関氏の論文や上野氏の年表にゆずることとし、ここでは彼の著作についてのみ記すことにする。

照任の著作は相当数あったらしいが、ほとんど散逸して、残っているものは少ない。上関光三氏は、残されたのは「葉草御用書上」と「採葉使記」の二つのみとされているが、そうでもないらしい。その反面、照任の書とされているが、実は彼の曾孫阿部喜任(樸齋)の著書であるものもある。こういった点をふまえ、当館蔵書のうちから彼の著作を拾ってみよう。

- (b) 御葉草御用相勤候趣申上候書付写 阿部友之進 写本 大 一六丁 (特七—六九)

伊藤文庫本。宝曆三年(五_三)正月二十二日、照任が死の数日前に書き上げて、上進したもので、彼が幕命を蒙った享保六年(二_七)以来の三十余年間の採葉活動を知る上での有力な資料である。内閣文庫にも同じ写本があり、上関光三氏が校訂して、「葉草御用書上」と題して、『南部叢書』第十冊(盛岡 昭和四年刊)に収録した。本稿でもこの「葉草御用書上」を通称として用いる。上田三平氏も、『日本薬園史の研究』の三四頁から七頁にかけ、同じく内閣文庫本から、葉草に関する項だけを抜萃して、掲載している。当館蔵本には、巻末に、小菅又三郎が、文化十年(四_八)十二月付で、前原八十郎・江見新五郎に宛てた「再養子奉願候覚」が付されている。

- (c) 御注進書 上言勤書 阿部友之進 写本 中 四

一丁 (特一—三二五)

白井文庫本。「御注進書」は、享保十一年(一七二六)七月三日、照任が町奉行に差出したもので、二通から成る。採葉の奨励と、薬草——特に甘蔗、人参、黄芩等——について述べている。「上言勤書」は、(p)と同じく、「薬草御用書上」である。

(r) 阿部将翁御注進書 同御薬草御用勤書覚 阿部友之進 写本 中 二五丁 (特一一一九五〇)

白井文庫本。(q)と内容は同じく、「御注進書」二通と、「薬草御用書上」から成る。野紙に記されている。

(s) 人参言上書 阿部友之進 写本 特大 一六丁 (特一一三三〇四)

白井文庫本。葆光書記(三田葆光)と久世子爵蔵書章の印がある。寛保四年(一七四七)二月、幕府の下問に答えて上進したものである。人参の内外の歴史について述べ、彩色の人参図五種が画かれている。巻末に「明治三十七年三月廿六日文淵堂ニ求之 白礫水」「大正十三年九月武田信賢氏蔵本ヲ以テ誤字脱漏ヲ訂正ス 白礫水再識」とある。朱字による訂正は白井氏の手であろう。

(t) 七種辨 阿部照任 写本 中 三五丁 (特一一二一九三)

白井文庫本。「田口明良蔵」の印がある。寛延元年(一七四八)の自序があり、「将翁阿部照任撰 乞橋本氏」と記されている。内容は、正月七日の七草粥に用いる水蘄、薺、鼠麴

草、藜蘆、黄瓜菜、菘、菜菔についての考察で、美しい彩画がある。本文は三一丁で、巻末の四丁は、原稿用紙に白井氏が次の「ななくさの考」の末にある補考の部を写したものである。その末に、「大正十三年四月呉秀三氏ヨリ七種考ヲ借写シ十八日午写之」とある。東洋文庫の岩崎文庫にもこの写本がある。彩画も美しい。

(u) ななくさの考 阿部照任述 (大田南畝編『三十輻』に収録)

(t)の『七種辨』と同じく、七草について考察したものであるが、(t)の前文と、主治の項目が略され、記述の内容も多少異なっているようである。巻末に「右一帖 三枝守寿君より伝て写し畢 安永二年己正月初九日」と記されている。当館には、この『三十輻』の写本が二部あり(一二三—一二三・辰—四四)、大正六年に「国書刊行会叢書」として刊行されたものもある。

(v) 白環藤緑 毛藪 阿加陀 阿部友之進 写本 中 一三丁 (特一一八一四)

白井文庫本。巻末に「享保十三戊申年八月 阿部友之進 小笠原石見守様」とあるから、一七二八年に照任が上進したものの写しであろう。白環藤緑が六丁、毛藪(もり)が五丁、阿加陀(あか)が二丁、朱字による訂正が散見される。

(w) 採葉使記 三卷 阿部照任・松井重康述 後藤光寧編 室曆八年序 写本

本書は厳密な意味での照任の著述ではない。照任と重康が、幕命を受けて、採葉使として全国各地をめくり、発見した動植物について口述したことを、高大醇が筆録し、一七五八年に後藤光寧が編さんしたものである。三十五国、百七品にわたり、陸奥国のものが四十種で最も多い。当館には写本のみで三部もある。第一(二三五—二四五)は、文政六年(二二)十二月二十八日の写本で、五六丁、「読杜草堂」(寺田望南)の印がある。第二は、白井文庫本(特一一四六四)で、七〇丁、編者の序を欠き、青山求青堂、松本幸彦・森立之の旧蔵本である。朱筆は甲戌(四八七)森立之によるものであろう。第三は伊藤文庫本(特七一—二二八)で、元治元年(六四)丹羽修治が尾州生濟堂大河内氏(存真)——伊藤圭介の笑兄——の書を借りて手写したものである。この「採葉使記」の内容は、前述の上関光三氏の「採葉使記を讀む」に詳しい。

照任の著書で、当館に蔵されているものは、以上のようなであるが、東大附属図書館には次のものがある。

(x) 将翁軒奇草集 阿部照任 写本 小 二二三丁

別書名は「奇草集」。東大にある写本は、田中芳男男爵の旧蔵本である。内容は、松菜、伊波奈之、鹹草、胡鬼子等の珍奇な草の解説で、図もある。巻末に「右祖翁之奇草集先考春庵賢任幼年之手沢也 喜任秘愛」とあり、さらに「本書ハ曾テ博物館ヘ献スル所ノ写本小冊子ナリ今之ヲ借

リ得テ写ス 明治廿一年二月中旬 田芳」とあり、田中芳男の手写であろう。岩波書店の『国書総目録』には、「奇草集」として収録されているが、「国書解題による」とのみ記され、所蔵館を明示していない(4)。

このほか、『国書総目録』には、阿部将翁あるいは照任の著として、『禽譜』・『阿部将翁建白稿』をあげているが、この二書は、後述するように、照任の著作ではなく、曾孫の喜任(樸斎)のものようである。

また、『先哲叢談続編』巻四の照任の伝には、『本草綱目類考』百廿卷・『本草徴義』十五卷・『採葉筆記』十卷・『将翁軒隨筆』・『同統筆』各二卷・『真偽諸葉考』廿卷・『三百種考』・『薬性要覽』・『薬性表扱記』各三卷・『人參耕作記』・『七十二候辨』・『人參辨正』・『大雅之論』・『硫黄孟考』・『柳岡雜記』・『精神考』各一卷の名をあげ、その他、雑著・叢録・未定稿数十卷があったと記されているが、いずれも現存していないようである。

照任の後裔——二人の将翁

照任の曾孫に阿部喜任(よし)という人物がいる。号を樸斎といい、字を亨、通称を友之進、巴菽園とも号した。文化二年(〇五)に生れ明治三年(七〇)十月二十日に歿している。この喜任を照任の孫とする説もあるが、曾孫とするのが正しいようである(5)。この喜任も本草家で、曾槃、岩崎常正等

に学び、本石町一丁目に住んでいた(6)。著作も多く、しかもその著作の多くは、曾祖父照任の場合と異なり、刊行されて今日まで伝えられている。当館にも、『聯珠詩格名物図考』二巻(7)・『格物瑣言』巻之一(草部)(8)・『救救善要』(別名『豊年教種』)二巻(9)・『草木育種後編』二巻(10)等がある。また『蝦夷行程記』二巻(11)・『繪英語箋階梯鳥之部』二巻(12)という著書もある。明治時代の博物学者男爵田中芳男(一八九六)は、昆虫を針で刺して標本とする方法をこの喜任に教わったといひ、また虫取御用巡回に際し、喜任の子の為任を助手として同行したといふ(『明治前日本生物学史』第一巻五三二頁)。

ところが、この喜任と照任がよく間違えられ、混乱を生じた。例えば、『明治前日本生物学史』第一巻で、喜任の著である『豊年教種』を照任の著作であるとしている(三三三頁)。上野益三氏は、照任と喜任の通称が同じ「友之進」であるため、混雑することがある(『日本博物学』、とされているが、阿部家は代々「友之進」を通称としたようである、通称が同じだから混雑したのではない。むしろ、「樸齋」と号した喜任が、晩年に「将翁」と号したことに混乱の原因があったと思う。天保年間に刊行された前掲の本草関係の著作には、「樸齋」の号が用いられ、「巴菽園蔵」と記されているが、晩年の作『繪英語箋階梯鳥之部』の序には、「将翁阿部喜任誌」と記され、封面にも「将翁軒蔵」とある。また、文久二年から三年にかけて、幕府は軍艦朝陽を小笠原諸島に

派遣した。これに加わった喜任が記した記録『豆嶼行記』(13)には、御軍艦方伴鉄太郎以下のメンバーの一人として、「御雇医師阿部将翁」と記されている。現在の阿部家の当主阿部士郎氏宅に残されている喜任の孫の一三氏の手になる家系図にも、「喜任、樸齋后将翁后又友進」と記されており、喜任すなわち樸齋が、晩年に「将翁」と号したことは疑ない。つまり、阿部将翁は二人おり、これが混乱の原因になったのである。

『国書総目録』の「禽譜」きんの項(第二巻・六二頁)には、著者を「阿部将翁」としているが、この「将翁」は、照任ではなく、喜任のことであろう。何故ならば、東洋文庫の岩崎文庫本の写本(14)を見ると、百十二の「ヤールホーゲル」等の項に、「天明八年来朝ノ甲必丹云々」とあり、天明八年(一七九七)は照任の歿年(一七九七)より後のことであるから、これを照任の著作とすることはできない。また百四十二の「クシヤク」の項には、「孔雀 ビーコック英」とあるから、英語のできた喜任の作ではあるまいか。この写本には、「文政十一戊子年秋八月書写 喜□」とあり、浅学の私はこの□の字の判定ができかねるが、「喜任」と読んでほしいと思う。

『国書総目録』の「阿部将翁建白稿」(五の項(第二巻)では、著者を「阿部照任(将翁)」としている。自筆の写本が市立図書館図書館にあるようである。文久二―三の間の菓草・果樹に関する意見書」と注されている。これも、年代から考えて、照

任の著作ではなく、喜任のものであろう。恐らく、この自筆写本に「将翁」の署名があるので、「将翁すなわち照任」と単純に解し、著者を「阿部照任(将翁)」としたのであろう。

当館には、阿部友之進の著で『挿訳英吉利文典初編』という書が二部ある。一は亀田文庫本(855-A171s)で、他は旧上野の古書(わ八三五―)である。慶応三年(六八)の刊本で、封面には「阿部氏藏板」、版心には「将翁書軒」とある。三四丁、左綴じ、序文は左から右への縦書きで、本文は横書きである。“The Elementary Catechisms. English Grammar. Fifth Edition. at Yedo. 1866” という英文タイトルが付されている。豊田実氏の『日本英学史の研究』(千城書房 昭和三八年刊)によると、初編ばかりでなく、二編、三編と計三冊出たらしい(同書一六九)。荒木伊兵衛氏の『日本英語学書志』(昭和六年序刊)には、「開成所版英文典の第五版を和訳したもの」と記されている(同書一三九)。上野益三氏は、この書も燦斎すなわち喜任の著書としているが、単に「友之進」とあるだけで、そう断定するのは危険である。「友之進」は阿部家代代の通称であり、もし喜任の書であるならば、「将翁」あるいは「喜任」の署名が入るのではなからうか。

喜任の子に為任(ため)という人がいた。前述のごとく、田中芳男が虫取御用巡回に際し、この人を助手として同行したというし、父と同じく、博物学界で活躍している。『植

物学訳解』(16)という書を翻訳し、父喜任の口述をもとに『勸農 駆虫法方』(17)を出版し、『農業図解』(18)を編輯している。また明治十年に文部省で編さんした『博物図教授法』にも参画しているらしい(19)。前掲の『挿訳英吉利文典』の著者「阿部友之進」は、あるいは、若い頃のこの為任であるかも知れない(20)。

(1) 白井光太郎氏は、『本草学論攷』第一冊では、享年八十余、多くても九十歳としている(同書五三頁および三〇頁)。白井氏によると、百四歳説は、曾占春の作った将翁阿部先生碑銘によるもので、これは文政年間に書かれたもの、照任の死後七十年のもので、あまり信用できない。照任自身が記した『御本草御用勤書覧』(すなわち「葉草御用書上」)に「享保十七年西国四国飢饉の節……私共六十余齡罷成候得共……」とあるから、この年すなわち一七三二年に仮に七十歳としても宝暦三年には九十歳である。これが白井氏の主張である。白井氏の『増訂日本博物学年表』には「年八十八」と明記されているが(同書一三七頁)、この根拠は明かでない。

大槻如電の『新撰洋学年表』(昭和二年刊)には「阿部将翁 八八 正月廿八日 江戸三輪梅林寺」(五六頁)とある。

湯浅明氏は、慶安三年生れ、宝暦三年歿で、八十四歳(一説では百四歳)としているが(『明治前日本生物学史』第二卷二二六頁)、八十四歳では、年が合わない。

照任の曾孫阿部喜任の著『救救拳要』(別名豊年教種)の

例言に、「予祖翁将翁先生享保十七年西州饑饉の時、……行年八十六歳にてありけれども……」とある。これによれば、将翁すなわち照任の享年は百七歳、生れたのは正保四年（一六四七）ということになる。石橋栄達氏はこの説をとっている（『科学史研究』第二一五号三五頁、同第一七号三五—三六頁）。上野益三氏は、白井氏と同じく、『御菓草御用勅書』すなわち「菓草御用書上」の「享保十七年六十余齡」を最も信頼性があるとし、八十余歳説をとっている。その傍証として、『採葉使記』の凡例に「両翁（照任と松井重康）共ニ宝曆中迄ニ壯健ニ存在シテ何レモ八十有余ヲタメテリ」とあるのをあげている（『日本博物学史』二二九頁）。

ただ問題は「菓草御用書上」の記事である。当館所蔵白井文庫本の「上言勅書」と「御菓草御用勅書覚（すなわち(4)と(1)）」には、白井氏のおり、「享保十七年西国四国飢饉の節……私共六十余齡罷成候得共……」となっているが、伊藤文庫本の『御菓草御用相勅候趣申上候書付写』（すなわち(2)）には、「六十余齡」ではなくて、「七十余齡」となっている。内閣文庫本も同様らしく、『南部叢書』第十冊に収録されている「菓草御用書上」にも「七十余齡」となっている。これが正しいとすると、照任の享年は九十余歳ということになる。

(2) 『先哲叢談続編』巻四によれば、照任は、延宝中、大阪へ向う途中で遭難し、阿馬港に漂着し、広東から杭州に移され、杭州で医術、本草を学んだ、というが、『皇国名医伝』中巻によれば、江戸へ向う途中で遭難し、福建に十八年間止まり、ここで本草を学んだ、という。目的地、漂流先等、両書の記述内容に相違があるばかりでなく、照任の中国

行きそのものにも疑を抱く人が少くない。菅敬愛氏は「当時ノ法度ニ依レバ海外ヨリ帰還セシ人ハ必ず長崎奉行ニ於テ其ノ顛末ヲ糺問シ各諸侯ニ照会シテ処置ヲナシタルモノナルニモ拘ラズ将翁ニ就テハ此等ノ始末ヲ記シタルモノヲ見ズ是レ子ガ寡聞ノ致ス所ナランカ」と記している。中国漂流のことは彼自身の記録には見当らず、「御注進書」には、「乍恐私儀若年より医学仕、且又諸本草数十部多年相考其上に而、相知不申候物は兼より肥前長崎に手寄の者相求、此世話を以、異国より薬本を取寄拝見仕候物五十六種御座候」と記されている。上野氏も、この記事に重きをおき、中国渡航の事実を疑っている（『日本博物学史』五五頁）。

(3) 「御注進書」によると、照任は元禄末年から建白の希望を抱いていたが、目代の役人にとり上げられないだろうことを恐れて、時節を待っていたという。

(4) 『将翁軒奇草集』が東大附属図書館にあることは、尾藤正英氏の論文によって知った。東大には故田中芳男男爵の蔵書が入っているとのことである。

(5) 『先哲叢談続編』巻四の彼の伝記の末には、「晩暮妾を畜ふ。是任を生む。是任、□任を生む。是任早く歿す。是任幼にして孤、長して医を以て業と為し、喜任字は享文を生む。樸齋と号す。善く家学を継ぐ。亦余に従つて字ふ。」とある。文面から察すると、「是任幼にして孤」の「是任」は、「是任」でなく、「□任」の方が正しいような気がする。沢弼氏は「将翁の嗣は是任といった。晩年の出であった。幼にして孤児となったけれど、将翁の子だけある。長じて本草医となり巍然として世に立った。其の子を喜任といった。樸齋

と号した。矢張り本草家が名があった」と記し、喜任を照任の孫としている。上野氏は『日本博物学史』の三六九、四六九の各頁では、「孫」と記しているが、五九二頁では「曾孫」としている。喜任の孫に当る阿部二三氏が記し、現在荒川区東尾久の阿部士郎氏宅に残されている阿部家の系図によると、照任の長子が義任、義任の子が義明(後に堅任)、堅任の次子が喜任となっている。つまり、喜任は照任の曾孫ということになっている。照任の歿年が一七五三年で享年八十余歳ないしは百余歳、喜任の生れた年が一八〇五年であるから、曾孫とする方が年代的にも有力であろう。喜任の作『連珠詩格名物図考』に見える曾樂の序文には、「抑々櫟齋為人、自少年、欲與遠祖丹山氏之遺業。」とある。「丹山」は、『先哲叢談続編』巻四にあるように、照任の字である。「遠祖」というのは、「高祖、曾祖以上」であるから、照任は喜任の祖ではないであろう。

(6) 西村宗七編『江戸 広益諸家人名録』(江戸 須原屋 佐助 天保七年刊)・関根只誠編・関根正直校『名人忌辰録』二巻(東京 吉川半七 明治七年刊)による。

(7) 文政庚寅すなわち天保元年(一八三〇)序。刊本。当館には二部あり、一は、一〇一八九、他は白井文庫本で、特一一六〇五。白井文庫本には「白楽邨莊衣笠氏図書」(衣笠豪谷)の印がある。封面に「櫟齋阿部喜任纂輯」とあり、目次には、巻八まであることになっているが、刊行されたのは、巻一、巻二の草部だけらしい。

(8) 天保壬辰(一八三三)序刊本。当館白井文庫本(特一一二九四四)は巻一のみであるが、『国書総目録』による

と、十巻で、写本が静嘉堂文庫にあることになっている。

(9) 巻頭の書名は、「救歎善要」。封面は、「豊年教種」。天保四年(一八三三)序刊本で、本文は二六丁。当館には三部ある。(二〇九一三一・特一一三五八一・特一一二六六七)

(10) この書は、喜任の師の岩崎常正の『草木育種』の足らない所を補う意味で著したものである。例言は丁四すなわち天保八年(一八三七)。当館には三部あり、第一(一四五一)の巻末の刊記は天保丁酉であるが、第二(一八一六七)は、巻末の刊記が文化十五年すなわち文政元年(一八一八)となっている。これは、恐らく、岩崎常正の手になる『草木育種』の刊記が混入したものであろう。第三は白井文庫本(特一一七八〇)で、明治九年刊である。

(11) 喜任が、照任の旅行記をもとに、諸書を参酌して記し、松浦弘が校訂したもの。二巻二冊。安政三年十一月、播磨屋勝五郎蔵板。巻頭には「阿部喜任纂述 松浦弘校訂」とあり、序にも「櫟齋阿部喜任誌」とあるが、巻末の刊記には「阿部将翁著述 松浦武四郎校正」とある。(わ二九一・一一一)

また喜任は、宋の范成大の『梅譜・菊譜』を、文政十三年(一八三〇)に校刊(当館所蔵本 特一一八五九)しているし、玉蘭齋(橋本貞秀)画の『万象写真図譜』(刊本 一九丁 特一一二五八五)の識、桜溪主人の『長楽花譜』(文久四年写本 三五丁 特一一五九)の天保辛丑(一八四二)の序も記している。その他、『巴豆考』・『隱居放言』七巻という著書もあるらしい。

(12) 慶応三年(一八六七)刊本。画は服部雪齋で、喜任の子の為任(碧海)の校刊である。当館蔵本(特七一五六三)は伊

藤文庫本で、昭和十四年五月一日の伊藤篤太郎の識があり、丹羽修治の遺書によって、篤太郎が自ら影写補充したと記されている。補写の部分は四丁で、彩色がない。

(13) 白井文庫蔵(特一一二九七〇)。写本。七三丁。卷末に「大正五年三月廿一日廿二日ノ兩日ニ写子白井礫水誌」とある。喜任はこの渡航の際、一年近く小笠原に滞在し、翌文久三年に帰国している。上野益三氏によると、幕府は文久元年十二月にも咸臨丸を小笠原に派遣し、その一行にも喜任(樸齋)は加わっているという(『日本博物学史』五八一頁)。喜任の小笠原諸島行きについては、天理図書館に『南嶼行記』という林若樹筆の写本があるらしい。『天理図書館稀書目録和漢書之部 第三』一七七頁によると、上・中二巻で、下巻を欠いているらしく、樸齋すなわち喜任の著で、子の為任が校訂しているらしい。「文久二年小笠原島行記」と注してあるが、これと当館蔵の『豆嶼行記』との関係はどうであろうか。

(14) 書名には「将翁軒 百千鳥」という頭書が付されている。写本で二冊。内容は鶴之部一四八種、鳩鴿類一二八種、番外三種の解説で、上冊の末に養法目録四五条が挿入されている。卷末に、「明治二十四年十二月写ス 但シ原本ハ伊藤理學博士ノ藏書ヲ借写」とある。この書は東京国立博物館にもあるようである。

(15) 別書名は「南嶼猷白艸」。この本と、岩瀬文庫の目録(四三三頁)に見える「南嶼産物志 一冊 小笠原植物誌 稿本 写本 阿部樸齋」との関係はどんなものであろうか。この「南嶼産物志」は岩手県立図書館にもあるようである。

(16) 安倍為任訳・伊藤謙校補。甘泉堂 明治八年刊。八

卷 三冊(特三七一五二一)。植物学の概説書で、翻訳書らしいが、原書名は不明。

(17) 安倍喜任口授・安倍為任増訂。明治二年刊。一三丁(特一一三四四)。蝗対策について記す。

(18) 安倍為任編輯。明治二年刊。二卷 二冊(特三九一四七〇)。いろは順に農具等を図解。

(19) 大西伍一氏の『老農伝』(平凡社 昭和八年刊)の田中芳男の伝記には、「明治十年に発行した文部省編纂博物図教授法は田中訳・小野職繁編・安倍為任解となつてゐる」と記されている。大正二年五月開催された田中芳男君七六記念会には、この『博物図教授法』二、三(小野職繁編・安倍為任解)が陳列されたらしい。大日本山林会編集の『田中芳男君七六展覽会記念誌』(大正二年刊)の五一頁にその名が見える。

(20) 「新旧時代」第七冊(大正十五年十月一日)の三八頁に、「英字典ヲ最初翻訳ナシタル阿部友之進勝任云々」という記事があるので、この「友之進」は為任ではなくて、勝任という人物かも知れない。上野氏は為任の歿年を明治五年としているが(『日本博物学史』、五九七頁)、為任は前述のとおり、明治八年から十二年にかけて数冊も本を出しているからこれは疑わしい。阿部家の当主士郎氏によれば、菩提寺梅林寺の過去帳には、為任の生年は弘化二年四月九日、歿年は明治二十六年十一月十二日と記されているという。また荒木氏の前掲書一八八頁には、阿部友之進の著書として、『英学捷徑七ツ以呂波』(慶応三年 巴齋園蔵梓)をあげ、その書のタイトルには「碧海」阿部為任著」と記されているという。

(なかだ・よしのぶ 支部上野図書館長)